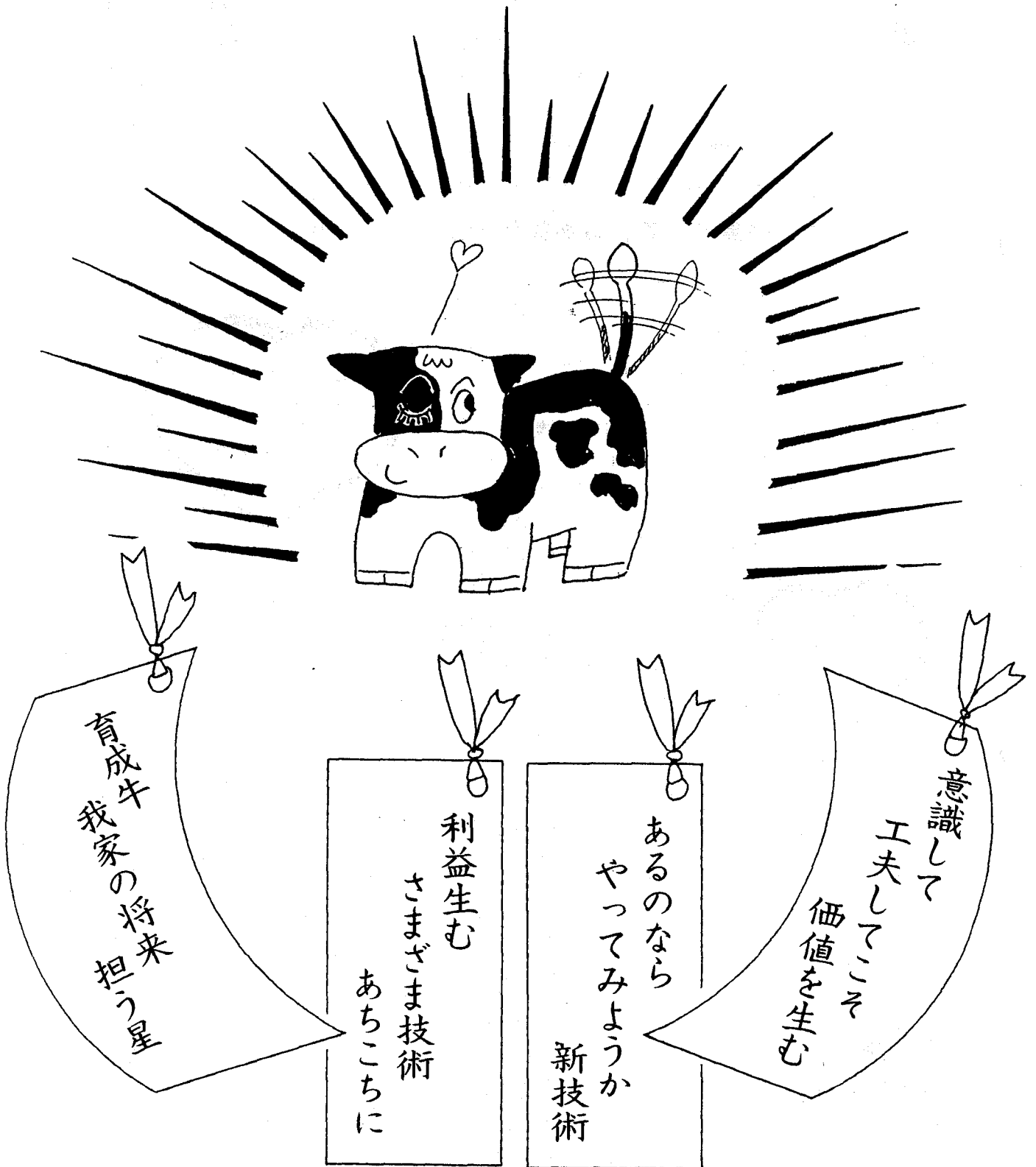


I. 育成牛、限りなく大きい その可能性



1. 大きな利益を生み出す資産、それが育成牛です

(1) 育成牛（未経産牛）の価値を見直そう—時代の変化を嗅ぎとろう—

酪農はほぼ完全に“新感性時代”に入ったようです。

乳価の長期的な低落傾向と個体単価の構造的な低価格推移、および農場内における豊かな自由時間の創出や楽しんで仕事をできる条件づくりの要求…この3つがその背景です。

新しい感性とは、生活のビジョン（生き方）を明確にし、その目的のために戦略・戦術・技術体系そして技術を組み立て、合理的に、利潤発掘的に経営を展開する性質です。

今までは、ただ何となく、慣行的に、惰性的に、近隣に合わせ、問題解決的に、与えられた条件に対応して、少々意味や目的が不明でも…一生懸命ならば、ナントカ経営の維持をしてこれました。しかし、それは背後に、安定乳価、時々ある高価格個体販売、潤沢な資金繰り、無言で頑張ってくれる家族達……があったからでした。

新しい感性の特徴である「目的合理的」な目で現状の経営方法や技術や作業法を見渡せば……まだまだ膨大な未成熟と可能性が見えてきます。

その中でも、育成牛に関する可能性は、他より突出したものがあります。今まであまりにも放たらかせられてきた未経産牛に、幅広く・深く・大きな希望が見えてきます。

新しい時代における利潤の源としての育成牛の価値を、新しい目で本気に見直してみてください。

(2) 3つの顔を持つ育成牛—相手の立場を理解しよう—

- ① 搾乳牛の更新用と多頭化用————産乳性・産仔性・作業性の向上につながるような育ち方
 - ② 個体販売用————有効な個体販売を実現できる育ち方や持ち方
 - ③ 作業を要する扶養的な家畜————少量・軽質で交代の可能な作業を実現できる管理体系
- 育成牛のこの3つの顔（目的）を、総合的に立たせる。そんな育成技術をこの特集資料で考えます。

(3) 理想と現実の大きなギャップ—だから大きい可能性—

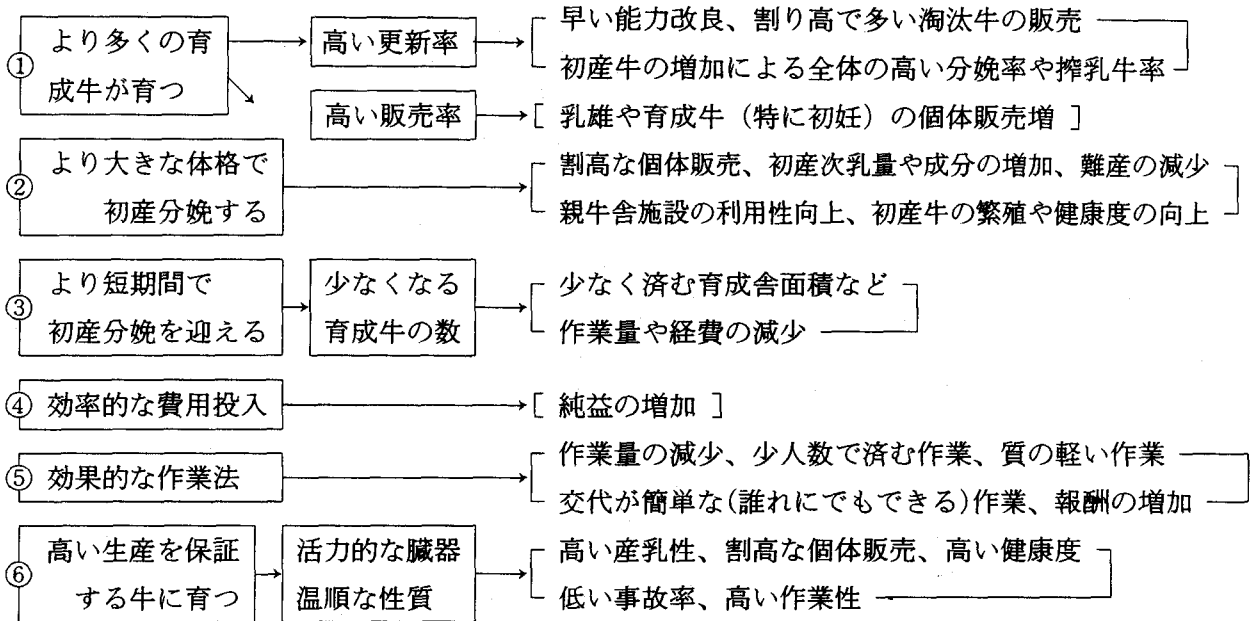
熟慮され、体系化された育成技術は、上の3つの立場を十分に高め、経営に大きな利潤を提供します。目の前に転がっているこの大きな可能性を、ほとんどの酪農家は認識していません。

今現在の育成技術とこの得うる可能性…との間には大きな、ほんとうに大きな差があります。例えるなら、天井までの利潤を手中にすることができるのに、現実には腰掛けテーブル位の技術程度らしい…ということ。

技術は、「以前よりこんなに良くなった」ということではなく、「理想にどこまで接近したか」、あるいは「平均的な酪農家の水準に対して、どの位の水を開けているか」が大切なのです。

この理想なるものの推定が不十分だと、天井が見えず、今の自分の技術が思い計れません。しかし、ともかく、そんなに困難を伴わず「天井技術に近づける可能性」があるのです。酪農家や関係者はこのことの意味を「先ず思い込んで、腑に落としてしまう」ことが肝要です。それが技術再編への心構え的なスターターとなります。本書にはその天井技術への道筋を詳しく解説してあります。

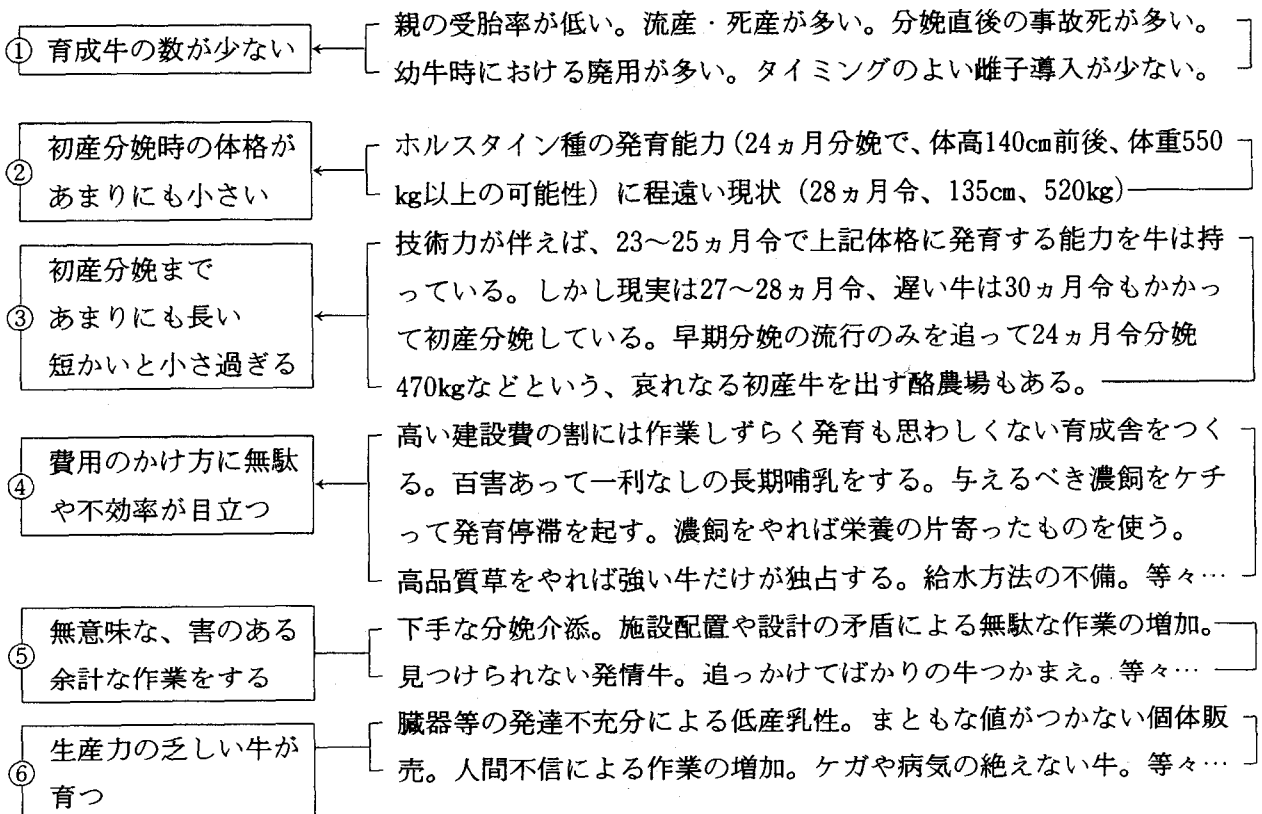
(4) 育成技術の向上がもたらす“6つの効果と巨大な利潤”—ホントです—



度肝を抜かれる利得の山ですね。しかし、多くの酪農場においてはこの豊かな実りの獲得を放棄しているように見受けられます。「今よりも少しでもより有益に技術変化する」ことによって、この6つの成果が増幅し、右の方の具体的な利潤を積み上げ、かつ連鎖してゆくわけです。

べら棒な数の技術を持つのが酪農の大きな特徴です。部分に点在する細かい収益増を、無茶苦茶に数多いその部分の総和によって経営成果を求める産業なのです。育成技術だけでもこんなに多くの利益誘導構造を想定できるのです。これを「放ったらかして、野ざらし」にしておく手はありません。

(5) 現実の具体的な育成技術水準（番号は上の図に対応）—やはり、ホントです—



(6) 何故、育成技術はないがしろにされるのだろう？—あなたはどれに該当しますか—

- ① 育成牛の持つ資産価値が分りづらい。利益がすぐ見えてこない。
 - ② 曲がりなりにも何とか育ち、そのうち孕んでくれる。
 - ③ 親になって3産目ぐらいにもなると、大抵はちゃんと乳が出る。それが普通と思えてしまう。
 - ④ 生産なしで負担ばかり伴う…と感じる。積極的な資産造成だとは思えない。
 - ⑤ 特に哺育技術などは…伝統的・習慣的な技術に固定化されやすい。
 - ⑥ 片手間仕事、余分な作業…とってしまう。サッサと片づけてしまいたい。
 - ⑦ 技術や作業の体系を、本気で考えねばならぬ程、時間を要する仕事でない。
 - ⑧ 辛抱強く働いてくれる父母や奥さん、あるいは遊び盛りの子供の仕事になっていることが多い。
 - ⑨ 技術の失敗で、一遍にとんでもない損害を滅多に受けない。直接的な損失に見えづらい。
- 等々。いろいろあげられるが、中でも最大級の理由は①と⑥と⑨のように思われるが…。

(7) 酪農経営の収入構造を“本気で”理解しよう—分っているようで分っていない—

右図に酪農収入のほとんどの可能性を示しました。酪農には多種多様な価値を生み出す物（資産）があります。そこから得られる収入の種類はとんでもなく多岐に渡ります。舌を巻いてしまいます。

豊かな経営の弾力性と、部分ではなく、総合で利潤を得る産業であることがよく分ります。

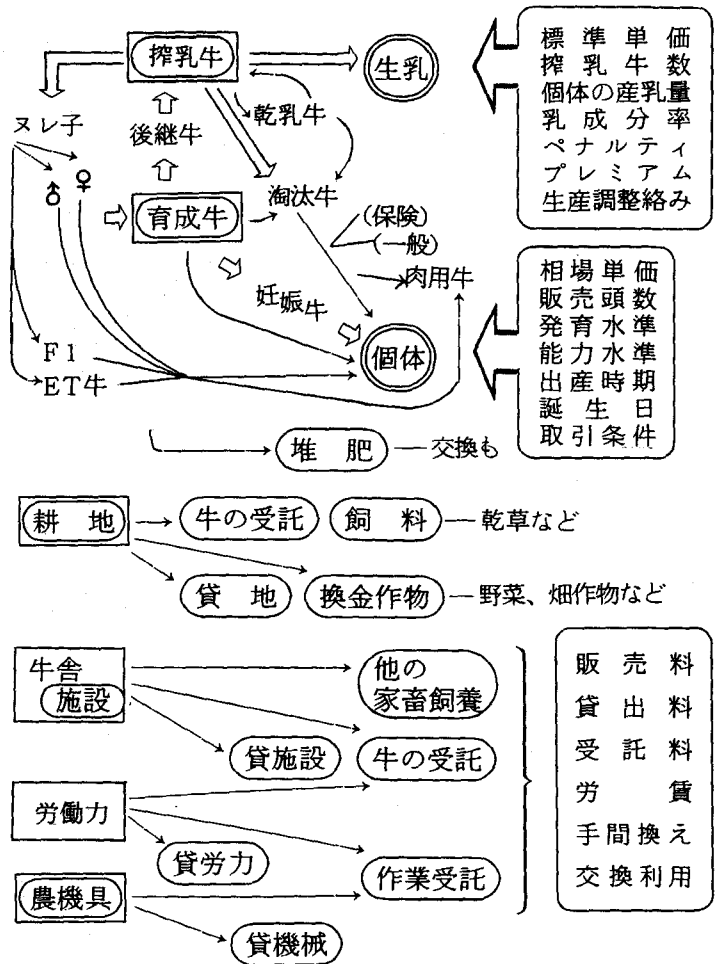
酪農業経営の核心は、当然「搾乳牛」から乳を生産し販売する所にあります。「育成牛」は、そこから付随的に生じる資産です。

しかし、現実的には、この育成牛の「出来方」如何が収入に大きな影響を与える分野になっています。今後一層、それは増加の一途となります。

生乳と個体に関し、図の右側に、収入を規制する要因を記しました。たくさんあります。各々の項目すべてに奥深い経営力と技術力が係わります。

例えば、以下のようなことです。

搾乳牛の繁殖技術が向上すると、年間産仔数が増える。増えた牝犊はヌレ仔販売や肉用仕向けを増やす。一方、多く生まれた牝犊は、育成牛数を増やし、ついには年間の初産次牛を増やす。それ



標準単価
搾乳牛数
個体の産乳量
乳成分率
ペナルティ
プレミアム
生産調整絡み

相場単価
販売頭数
発育水準
能力水準
出産時期
誕生日
取引条件

販売料
貸出料
受託料
労賃
手間換え
交換利用

備考
丸枠内が収入。2重丸が主たる収入。
角枠内は収入を生みだす資産。
角と丸のダブリは資産処分時の収入。

が更に、搾乳牛の更新率を高めたり、多頭化仕向け数を増やす。また、更新や多頭化がそれ程必要でなければ、初妊牛などを数多く販売できる。一方、更新率が高まると、搾乳牛の淘汰率が高まり牛群の性能アップを進める。その結果、更なる産乳や繁殖の向上を誘導する。それが再び産仔数を増やし…という風に、技術は影響を輪廻させ、収入を変化させるのです。

一度、このような好循環パターンを得ると、そこには自動的に収益増を見込める形ができ上がります。ここに更に「育成技術の向上」という大きな歯車が加わると、より豊穡な輪廻を生み出します。

(8) そこで、育成牛の資産価値を十分に理解しよう—そこから経営のパラエティが生じる—

自家用と販売用の2方向の資産価値を、育成牛は持っています。

自家用としての価値は、当然、親になった時に高い経営貢献牛になることです。

少しでも好条件(6つの)で初産牛に育てれば、後は半自動的に、搾乳牛からより多い利得が生じてきます。例えば…

同じ月令なら、少しでも骨格的に大きな体で初産分娩すれば、難しい初産牛の管理が容易になります。それは飼料給与での気むずかしい特別扱いを減らし、かつ飼料効率も高めます。一方、そのことが、初産牛の産乳量や成分率を上昇し、牛群全体の水準向上も招きます。更に、負担の少ない栄養管理は、体調をよくし、上乘せ的に産乳性を高めます。繁殖性の向上や淘汰牛の減少にもつながります。また、大きな体格で分娩することは安産性の向上にもつながり、上の成果に更に上乘せされるのです。同じことが他の技術要因についても言えます。

いずれにせよ、このような良性の変化過程を長期的な視点で発想し技術化することが肝要です。

販売用(商品)としての資産価値は、自家用としての育成牛の立場が成就されなければ、陽の目を見られません。要するに「搾乳牛管理の向上に並行して、育成牛管理も向上」しなければ、販売どころの話ではないわけです。ここの所の深い意味をよく反芻して考慮してみてください。

- ① どのようにでも処分、いつでも売却できる自由な商品である。
- ② 次々と誕生成育し、いろんな段階の商品として存在している。
- ③ 購買や販売が自由なので、育成牛保有バランスの調節・分散・集中を思うようにできる。全く育成牛を持たない方法から、購入してでも余分に持つ方法まで幅広く経営的な応用が効く。
- ④ 相場型で値動きする。時代の流れや季節的な需給関係などを嗅ぎ分け、自己の取引能力を存分に発揮できる。

スタンション数以上に経産牛を多く飼う技術や、本州が割り高牛でも高価格購入する時期、分娩時期や伴う飼養技術の水準による産乳量の違い…などを育成牛の保有数に反映できる。

- ⑤ 経営内にある作業に貢献できる人や雇用人の作業性向上、余剰飼料(あるいは割安購入)やゆとりのある建物施設(あるいは割安建設)の利用度向上…などに育成牛を利用する。

資産としての育成牛の特徴を左に説明しました。

育成牛を見るあなたの目をこのような資産価値の分析を通して、変えてみませんか。

膨大な利益と楽しみながらやれる作業や経営—それが育成牛を飼う技術の向上と、その保有の仕方と、その利用タイミングによって生まれるのです。

サブ! 育成技術を高めよう。

2. 都府県酪農と乳牛移出の在り方—酪農新時代における新共存関係を探る—

(1) 完全に変わりつつある府県の酪農—それは正に構造的なものである—

ここ数年、特に平成3年は、道外酪農に大きな地殻変動が起きている。そして、その余波は津波となって北海道、特に専業酪農地帯を揺り動かしている。ともかく、飲用の普通牛乳生産が頭打ちあるいは減少気配の兆候だ。需要増とのバランスをほぼ完全に失っている。そのあおりなどで、飲用乳の道外移出が急増傾向を辿ってきた。(しかしそれは全体の10%程度であり、かつ、輸送事情や鮮度あるいは輸送コストなどの問題があり、継続的な伸びには懸念を予想する人もいる。)更にそのあおりで加工原料乳までが不足状態になった。それらがめぐるめぐるって乳製品の輸入や加工乳(還元乳—脱粉等を調合してつくる飲用乳)の増加を招いている。折角の飲用乳の需要増に対応し、フレッシュ牛乳を提供し、酪農振興を得るチャンスなのだが…諸般の事情がそれに水を差しているようだ。

この情況は、次ページ関連図の都府県酪農の事情からくる構造的(当分変わらない)な事態である。その波紋は個体販売価格、特に初妊牛価格の大幅低下にまで及んでいる。もっとも、その初動原因は牛肉自由化絡みの老廃牛価格“超”下落に端を発している。しかし、本当の大きな理由は、図に表現されているような深く広い、酪農継続意志を萎えさせる構造的な事情である。

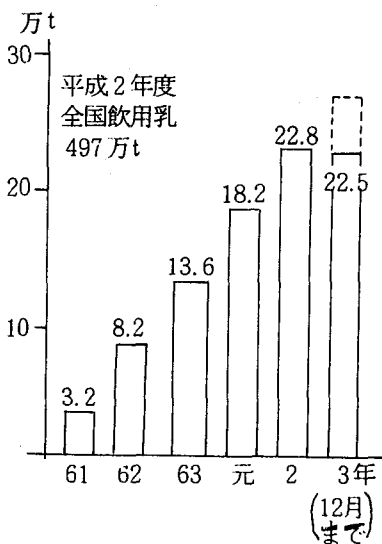
何故、このようなことになったのか。微力ながら関連図として次ページに分析を試みました。原因追求の参考にして下さい。そして、これらの事情を都府県酪農との協調的あるいはライバル的な関係の中で、北海道は、道東は、根室は、農協は、個人は…どう転回させれば“良い”のか、熟慮検討して下さい。相手(消費者と都府県生産者と道内他地域生産者)の構造的な変化に対しては、自らもそれを積極的に先取り改変して、新構造的に対処せねばなりません。

特に、初妊牛販売を中核とした育成牛の、都府県との関係は、共存または競存を踏まえて、生乳の本州送りと並び、戦略的に重要な意味を持っています。

乳価に多くを期待できない現在、それでも経営展開を上向きさせるために、この育成牛の持ち方、育て方、利用のし方、そして売り方が大きな鍵となります。次頁の図と本書全体の技術を、その検討材料にして、多様で期待しうる方向を見出して下さい。

(2) 参考資料

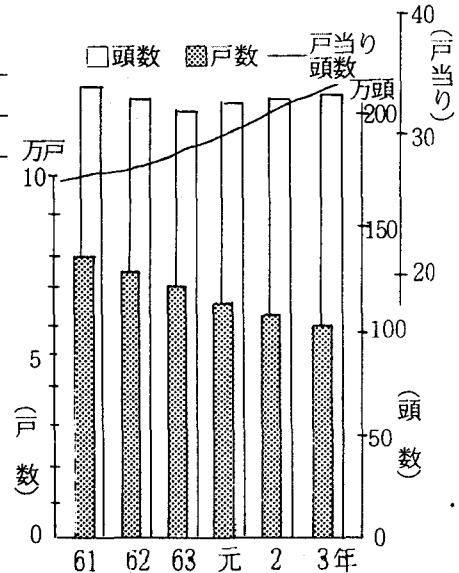
(1) 生乳の道外移出状況



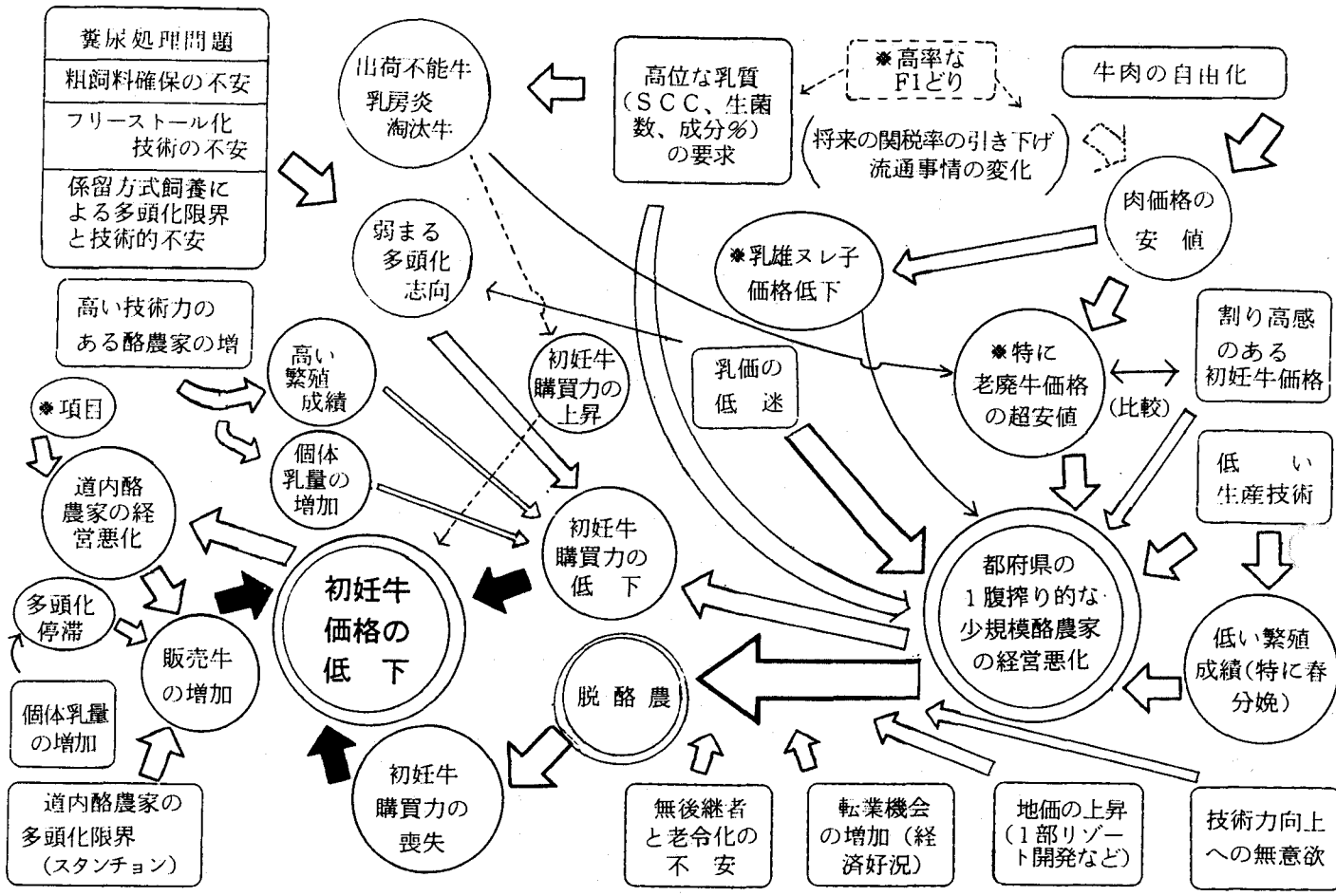
(2) 飼養戸数と頭数(3年2月)

(農林統計)	戸数 100戸	頭数 1000頭	戸当り 頭数	対前年比%	
				戸数	頭数
全国	598	2067	35	94.5	100.4
北海道	146	870	60	97.3	102.7
東北	121	218	18	93.8	101.0
北陸	13	37	28	93.6	100.5
関東・東山	136	390	29	93.2	97.7
東海	30	117	39	94.0	98.0
近畿	31	80	26	92.9	97.4
中国	37	96	26	92.9	99.1
四国	23	53	23	92.0	96.7
九州	59	197	33	94.6	99.9
沖縄	2	9	?	94.7	104.7

(3) 戸数と頭数の推移(全国)(頭)



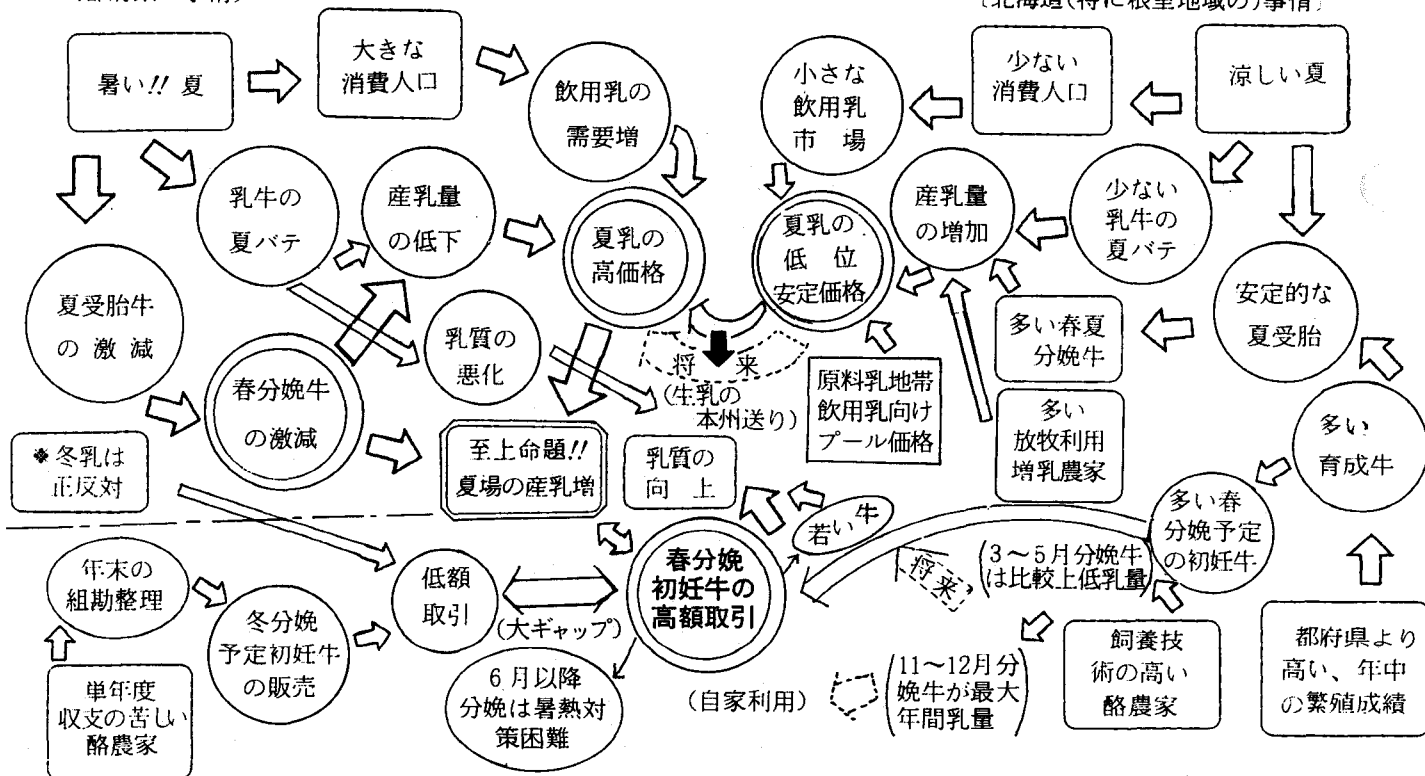
(3) 何故、初妊牛価格(生乳生産量一都府県)が低位安定しているのか — 原因相関図 —



(4) 春分娩予定の初妊牛が、比較上、有利な価格展開をするであろう理由

〔都府県の事情〕

〔北海道(特に根室地域の事情)〕



(5) 府県の皆さんにお聞きしました。

都府県の酪農と北海道の酪農との間には、以前から乳牛の導入と供給という立場での共存関係があります。当地域の酪農の将来を展望するとき、都府県の方々に『期待される乳牛』を供給することは、相手に利益の足がかりを提供しながら、私達自身も安定的な利潤を手にするために、極だって大切な経営分野です。

このような意味合いから、府県の酪農家と農業団体職員を対象に、府県酪農の動向・期待される乳牛・導入基準等についてアンケート調査を実施しました。個体販売に関する今後の参考になればと思いい紹介させていただきます。御協力をいただいた多くの方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

① 酪農家を対象にした調査

回答をよせられたのは75点で、この方々の経営規模・地域別戸数は次のとおりです。

飼料畑規模別戸数		経産牛規模別戸数		地域別戸数		
区 分	戸数	区 分	戸数	地 域	戸数	
1.0ha以下	15	10頭以下	1	東 北	21	
1.1～ 3.0	22	11～ 20	14	北 陸	0	
3.1～ 5.0	13	21～ 30	17	関 東	8	
5.1～10.0	6	31～ 40	19	東 海	10	
10.1～20.0	13	41～ 50	9	近 畿	11	
20.1以上	4	51～100	12	中 国	2	
合 計	73	101以上	3	四 国	12	
		合 計	75	九 州	11	
				沖 縄	0	
				合 計	75	

最小値： 0ha

最小値： 4頭

最大値： 150ha

最大値： 300頭

経営規模は広範囲に分散していますが、1戸当たり平均の飼料畑面積は約10ha・経産牛飼養頭数は44頭（100頭以上の3戸を除いた場合 37頭）で、初産牛率は27%でした。

問1 現在飼養している経産牛はどのようにして確保しましたか

保有経産牛の導入先割合

区 分	頭数	割合	区 分	戸 数
自 家 生 産	2305	74	61%以上	8
地 区 内 の 市 場	33	1	41～60	4
北 海 道 から 導 入	603	19	21～40	10
他 府 県 から 導 入	126	4	20以下	31
そ の 他	58	2	合 計	53
合 計	3125	100		

設問に対し72点の回答があり、このうち北海道から乳牛を導入した戸数は53戸で、頭数では603頭で19%でした。

問2 将来、経産牛はどのようにして確保する方針ですか

将来の確保先割合

区 分	割合
自家生産	82
北海道から導入	15
他府県から導入	2
その他	1
合 計	100

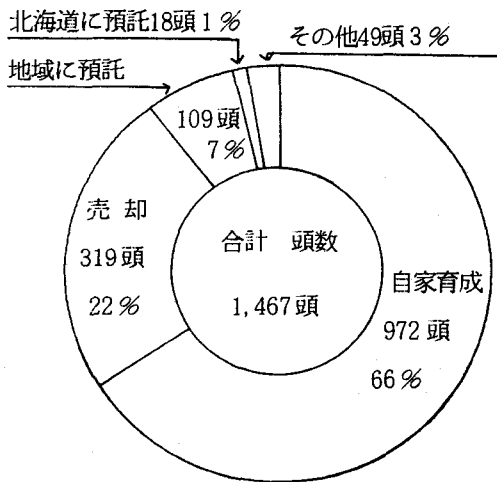
北海道から導入を予定している農場における経産牛に占める階層分布

範囲	51%以上	41~50	31~40	21~30	11~20	10以下
戸数	5	2	1	5	11	21

74戸の回答があり、その平均割合は自家生産が最も多く82%で、次に北海道から導入が15%（45戸）でありました。その内全頭数北海道から導入したいと回答したのが3戸ありました。

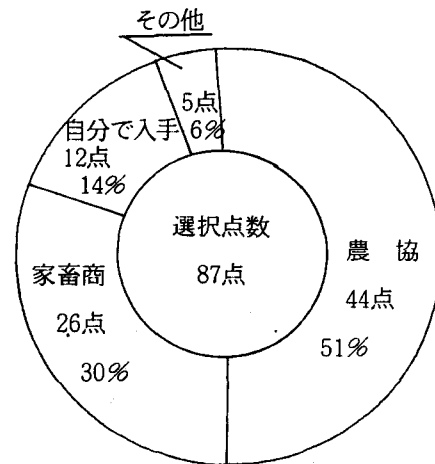
問3 この1年間、生まれた雌子牛はどのようにしましたか

74戸の回答があり、自家育成が3分の2で66%を占め、売却・地域の育成施設に預託の順になっています。



問4 北海道からの導入経路について

66戸の回答。農協を経路として導入したのが半数あり、家畜商・自分で入手の順になっています。その他には経済連・親戚等があります。



問5 この1年間何頭の乳牛を導入しましたか、また今後の見通しについて

過去1年間北海道からの導入の実績

区 分	戸数	頭数	左の内訳 (頭)		
			最小値	最大値	平均値
経産牛	11	45	1	10	4
初妊牛	42	236	1	45	6
育成牛	5	11	1	3	2
合 計	47	292	—	—	—

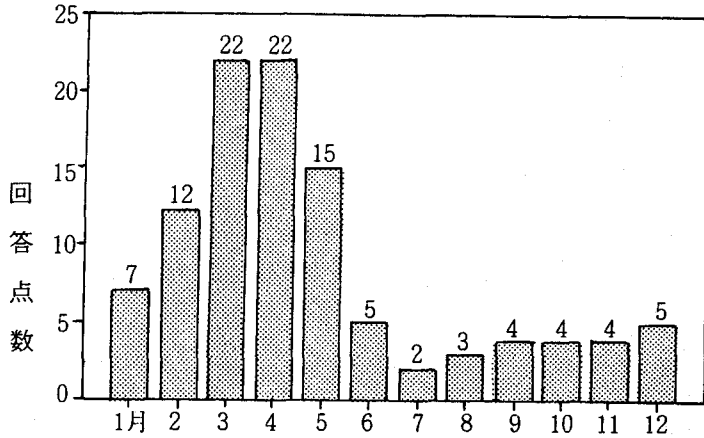
注 導入戸数の合計は実戸数

北海道からの導入見通し(現在との比較)

区 分	集計点数	内容別割合				
		増加する	変わらない	減少する	わからない	合計
経産牛	50	16%	34	24	26	100
初妊牛	64	28	27	25	20	100
育成牛	47	26	26	19	30	100

導入した乳牛は初妊牛が大部分をしめ、今後の見通しについては大きく変わらないとされています。経産牛については『減少する』が『増加する』よりやや多くの回答が寄せられたのに対し初妊牛・育成牛は『増加する』の回答が多く寄せられました。『乳搾りに専念したい』という傾向があらわれています。

問6 いつごろ分娩する乳牛を導入したいですか。



導入牛の分娩希望時期（複数回答）

希望する分娩時期は2月～5月に集中し、このことは府県の夏季の暑熱とのかかわりが深いようです。

今回の調査農家は大型経営が多かったため、春分娩牛に対する希望は低めに出てると思われます。もし繁殖技術がより低いであろう中小酪農家が調査対象に多かったら、より高い希望があると思われる。

ここに、個体販売取引の妙味がある。胎児の種類（ホル、F₁、和牛）までも含めて…。

問7 購入の判断基準はなんですか

区分	血統書	資質・体型	親の乳検成績	発育状態	生産農家	斡旋する人	その他	合計
選択点数	25	35	37	15	7	10	3	132

64戸の回答があり重複選択の回答を求めたところ親の乳検成績が最も重要視され、次いで資質・体型・血統書・発育状態の順になっています。

価値判断の明確化。このことが、信頼度の高い取引を保証します。

なお購入するにあたり次の意見が附されてありました。

- *親の乳検成績を付けてほしい
- *性質温順で飼いやすい牛
- *体型よりも資質の良い牛
- *初産分娩の月齢を25ヵ月にしてほしい
- *導入後、乳房炎等の事故の保証を検討願いたい

② 酪農関係機関の職員を対象にした調査

アンケートは全国各地の農協職員・家畜商等30名の方々に依頼し25点回答が寄せられ、回収率は83%でした。この方々の職業、地域別人数は次のとおりです。

区 分	人数
農業団体職員	23
家 畜 商	1
そ の 他	1
合 計	25

地 域	人数
東 北	7
北 陸	0
関 東	5
東 海	3
近 畿	3
中 国	3
四 国	0
九 州	3
沖 縄	1
合 計	25

～あなたの地域（市町村）の酪農についてお聞きします。～

問1 酪農家戸数・乳牛飼養頭数の今後の見通しについて（5年後）

戸数	増加する	0点
	変わらない	1点
	減少する	24点
	わからない	0点

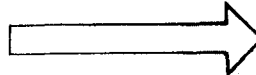
回答点数：25点

頭数	増加する	4点
	変わらない	10点
	減少する	11点
	わからない	0点

回答点数：25点

問2 酪農家戸数の減少の程度について（5年後）

5%以内	0点
6～10	10点
11～15	5点
16～20	7点
21以上	2点



酪農家戸数は減少すると回答したのが大部分で、変わらないとするのが1点でしたが頭数については、一方的な減少にはならず、規模拡大を予測しています。

また酪農家戸数の減少程度については、6～10%程度とするのが最も多かったものの、16～20%の高率を予測している回答が次に多かった。

問3 現在飼養している経産牛をどのようにして確保しましたか、おおよその割合を記入してください。

24点の回答があり内容は次の通りです。

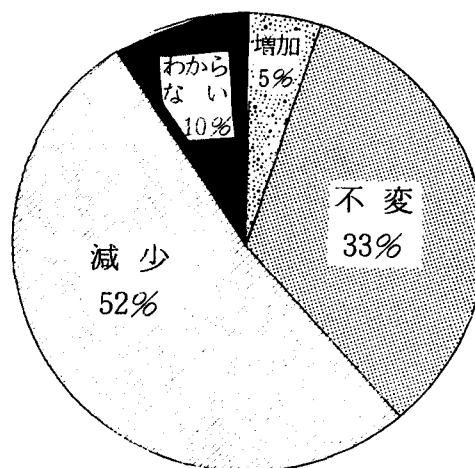
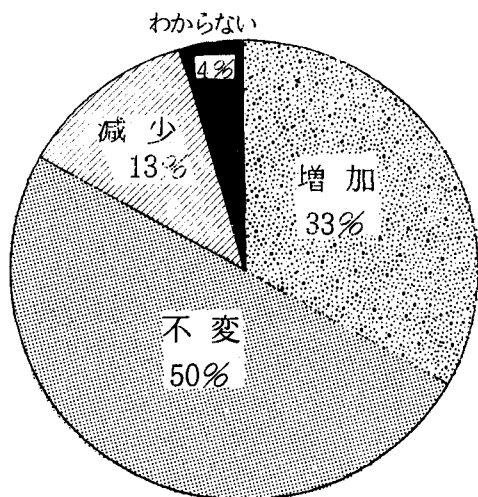
範囲別分布点数

回答 N O	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	平均	
回答者の所属府県	青森	岩手	岩手	岩手	岩手	福島	茨城	栃木	群馬	千葉	千葉	静岡	愛知	三重	京都	大阪	兵庫	鳥取	岡山	広島	佐賀	熊本	大分	沖縄		
確保先	地区内で確保	95	98	70	90	95	40	98	65	40	0	80	90	50	30	5	3	50	85	75	65	70	98	80	60	63.8
	北海道から導入	5	1	20	10	5	50	1	35	50	100	20	10	50	70	80	97	20	15	25	30	7	2	15	40	31.6
	道以外から導入	0	1	10	0	0	10	1	0	10	0	0	0	0	0	15	0	0	0	0	5	0	0	5	0	2.0
	その他	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	0	0	0	0	23	0	0	0	2.6

問4 今後、次の経産牛の確保方法の予測について () 内は回答点数

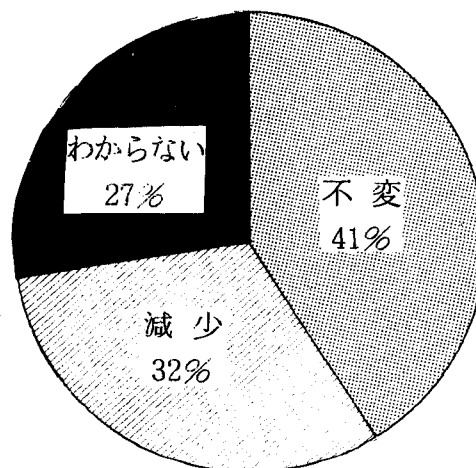
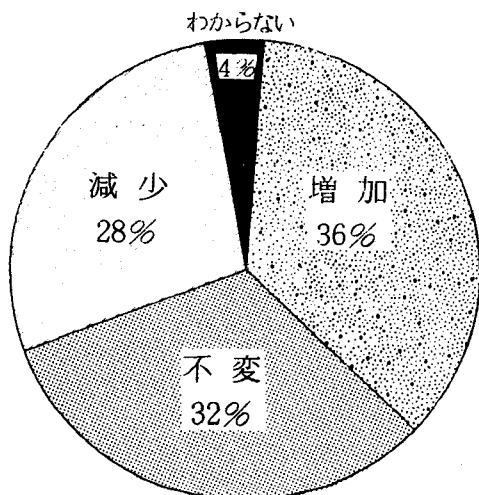
① 自家生産の動向予測 (24点)

② 地区内の市場 (21点)



③ 北海道から導入予測 (25点)

④ その他からの予測 (22点)



自家生産と北海道から導入については『増加する』と予測する回答が多くよせられました。

問5 北海道から導入の理由について

区 分	選択点数
自家生産困難	7
資質が良い	10
足・腰が強い	10
分娩時期の選択	16
購入しやすい	5
その他	1
合 計	49

北海道から乳牛を導入の理由は分娩時期を選択出来るとされているのが16点あり半数以上の酪農関係職員がこれを認めています。当管内は乳牛が多く府県の酪農家各自が自己の経営・飼養条件に適した分娩時期の乳牛の選択が出来るとされています。

次に、資質が良い、足・腰が強いとの回答があり乳牛個体の品質が認められています。

(回答点数25点 複数回答)

北海道から導入した乳牛のうち根室管内から導入した割合は32%でした。なおいままでに導入した乳牛について次のようなトラブルも寄せられています。

- *みかけはよいのに、『あたり、はずれ』が多い
- *分娩予定日があわなかった(種付証明書のくいちがい)
- *『故障牛』であることを知らされずに買わされた
- *乳成分にバラツキが多い

問6 今後、どのような乳牛を期待していますか

区 分	選択点数
資質の良い牛	18
体型の良い牛	0
足・腰が強い牛	12
親牛の産乳実績と血統	13
適当な分娩時期	7
そ の 他	2

『かっこう』の良い外観には関心がなく内面的(資質の良い牛)に充実している個体が要求されています。

以上、アンケートの結果について紹介させていただきました。府県といっても広範囲に亘っており、しかも少ない点数でしたので、的確な動向の把握になっていない点もあろうかと思いますが、それぞれの意味するところを理解のうえ、参考にいただければ幸いです。